



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	国民社会の研究各論 第一章 通巻第十四巻 : 生業構造
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Description	国民社会の研究各論 第5章 : 国民社会の社会構造 『鈴木栄太郎著作集 7 (国民社会学原理ノート)』を出版した際のソースとなった原稿である (同書内での言及による)。
Issue Date	1963-07-19
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77522
Type	manuscript
File Information	I031_0137414.pdf



各論 212 (1) (今 57 78)

2

K-1

19

— NOTE BOOK —

生 ~~活~~ 構 ⁴ 造
業

國民社會の研究

各 論

才 = ~~第~~ 章

(通卷才十四卷)

昭和三十一年四月十四日



スパルタノートの
連続発売品

DAIWA
240

SPARTA NOTE

CONTENTS

PAGE

一 民族の形成と発展
二 民族の形成と発展

十五卷の諸問題研究によって、民族の形成と発展の
 における問題のあやふさしきところとその大体的
 方向性がおぼろげながら定つて来た様
 ありから、これから各論の追及に向つて
 行く。十五卷を終了するまでに約三年半
 を要している。各論の追及が今から何
 年かよかまた見当もつかない。今からは
 取り組むやすい明白な事項から行つ
 けて行きたいと思つてゐる。

昭和三十一年四月十四日

□ 民衆における生活構造

ここで私は□民の生活を生業に因ず。生活とその他の生活に因ず。生活との二つの領域に分けてゐる。経済的な生産生活と消費生活との二つの面に分けてある。今の都市生活者について云ふなら職場における生活と家庭における生活の二つの面である。

動物の習性から見て現代都市の生活に至るまでこの二つの生活の面の区分はよほど根深い根柢をもちつゝその形に於ては、人が生活の中心に在るすゝはとその他

の生活に從事してゐる時とては、人の心の強弱も
も慣行制の型も質的に異なつてゐる様
に見える。一方は合理的一方は情義的
と割り切つて居る。これも大した性格は
ない程である。

和カニにゐる生活構造は右に述べてゐる
様な生活がはなれた生活の構造に
ある。和は日本の民衆にかけ、口民
の生活の構造を明かにする。爲には
次の如き同氏が一度説明をなすべ
い。なにも思ふところ。

一、口民衆の統一性は何の爲にあるか

一 人口と土地

一 土地と支配

一 人の命令

一 命令の中による生活の型

一 生活の型の基本的形式の

一 孤立の生活の不便不利不快

一 孤立生活の基本條件

a. 言語を介した交流文化

(文化と生活)
b. 生業を介した社会・交易関係

c. 統治

d. 通婚 (血縁文化)

e. 生活文化、消費又は購買文化

一、当分の間は十年の中口人生活

一、然し人は文化社会の中にお生したのであるから

最低限の社会条件のオを养え、必要は

あり

一人は社会生活に文化の中に

成長したものである。

一人は家族生活内の家族生活の中に

出生成長したと云ふから、家庭を

始めとし、いのである。

一、日本では従来長男は生家に親の居

るにあり、次男以下及、娘は結婚

によって他の家を始め、他の家に

入るかすゝ家族文化の中に生活して来
た。

た。

一 又人は青年期ぬまへ父母の教養の
生活をついけ青年期の^{中の}一つが生業に
ついて老成するまで生業をついけ
のかきかへあつた。成熟した者は生業をもつ
今日日本人の家族文化は急激に変
動しつつある。

一 古の農村は農村と都市でテンホが
多々異なつたが方向は一緒である。

一 都市と農村は鉄道の機関の存在
に過かたが、又家族文化は同じ

未知人の文化と未知人の文化の
本であつて、その結果文化の創造
も生じて来る。

文化の動いというが、都市文化と
農村文化は甚しく異なっている。同じ
生活の中にも都市と農村と二分して、
都市と農村の生活文化の根本的
相異は、^①文化の創造の別と生活
構造の別から生じている。

一、農村は生活内容の単一同質の面
積の集約である。その区画分的結
成の原理は地域の別以外にはた
い。機能集約は多くは同一地区の上
に重複している。

これに対し都市は生活内容の異なり

の団体

異質の非意識の他人界の職
場と家族と同居団体とは完全に
分離している。その為この二つの集團
を粹として形成される多くの社会生活
は農村における同一地域に集積する
集團活動に見られるものと全く異な
るものとなっている。社会構造の根本
的相異である。氏はこれを異質的に
詳論する可はる良社会生活の理
解に必要である。

次に生活構造の相異も見逃し
ないものである。

必要

二、に生活精選と云ふのは生活活動

(生活活動以外の)の為に人が住居より

は移動して住宅を接遇税を返すこと

及税後の住宅同様の生活活動

の形である。^{に思ふところ}私は都市の住宅生活

の中心かくの如き形を第一生活地区

第二生活地区第三生活地区として認

めたいのであるが、同様のものは農村に

おいては全く異なり、円形として第一

の中心はなからぬ。

第二第三第四第五生活地区第六生活地

区第七生活地区は存在すると思ふ

はか、ニては、その何れも村人は皆、平行線
を画すであらう。即ち村人は皆、同様に
A界外とA₁や都市とA₂十萬都
市に同化するであらう。

四月十四日

凡そ都市化は、村界外に描画
加勢加するものと未知人の増加する
と、全現代が増するを、原始的な
過剰としていふであらうから、近き構
造や生活構造の都市化の形は
都市化による。全現代がさうさせるの
であるともいふ。

總て全現代の過剰が、都市を中核

より区別せしめて。

都市化と共に、~~粗雑~~^{粗雑}的文化である。宗

教道徳も言語、神、儀、式、も、今、現

事務化し、然る生活も家族

化する。しなの法と経済のみの

である。と芸術

最も冷血な法と最も感情的な

芸術、の二か合理化しなの法

芸術である。一々の法に法

と力、一々の法に感情と愛、その内

に人間生活がある。

一口民衆の生活構造として第一

第一

(現在の時点において物をとるもの
過去と未来にも関心をもつもの)

構造のなり

第一

第二

第三

第四

第五

第六

第七

第八

第九

第十

第十一

第十二

第十三

交流のなり

第一

第二

第三

第四

第五

第六

第七

第八

第九

第十

第十一

第十二

第十三

第一
第二
第三
第四
第五
第六
第七
第八
第九
第十
第十一
第十二
第十三
第十四
第十五
第十六
第十七
第十八
第十九
第二十
第二十一
第二十二
第二十三
第二十四
第二十五
第二十六
第二十七
第二十八
第二十九
第三十
第三十一
第三十二
第三十三
第三十四
第三十五
第三十六
第三十七
第三十八
第三十九
第四十
第四十一
第四十二
第四十三
第四十四
第四十五
第四十六
第四十七
第四十八
第四十九
第五十
第五十一
第五十二
第五十三
第五十四
第五十五
第五十六
第五十七
第五十八
第五十九
第六十
第六十一
第六十二
第六十三
第六十四
第六十五
第六十六
第六十七
第六十八
第六十九
第七十
第七十一
第七十二
第七十三
第七十四
第七十五
第七十六
第七十七
第七十八
第七十九
第八十
第八十一
第八十二
第八十三
第八十四
第八十五
第八十六
第八十七
第八十八
第八十九
第九十
第九十一
第九十二
第九十三
第九十四
第九十五
第九十六
第九十七
第九十八
第九十九
第一百

第一
第二
第三
第四
第五
第六
第七
第八
第九
第十
第十一
第十二
第十三
第十四
第十五
第十六
第十七
第十八
第十九
第二十
第二十一
第二十二
第二十三
第二十四
第二十五
第二十六
第二十七
第二十八
第二十九
第三十
第三十一
第三十二
第三十三
第三十四
第三十五
第三十六
第三十七
第三十八
第三十九
第四十
第四十一
第四十二
第四十三
第四十四
第四十五
第四十六
第四十七
第四十八
第四十九
第五十
第五十一
第五十二
第五十三
第五十四
第五十五
第五十六
第五十七
第五十八
第五十九
第六十
第六十一
第六十二
第六十三
第六十四
第六十五
第六十六
第六十七
第六十八
第六十九
第七十
第七十一
第七十二
第七十三
第七十四
第七十五
第七十六
第七十七
第七十八
第七十九
第八十
第八十一
第八十二
第八十三
第八十四
第八十五
第八十六
第八十七
第八十八
第八十九
第九十
第九十一
第九十二
第九十三
第九十四
第九十五
第九十六
第九十七
第九十八
第九十九
第一百

と政治

第二章 上下統制 (政治的秩序)

第三章 社会秩序 (各種)

第四章 協力関係の秩序

第五章 協力の秩序的空間的秩序

序と承服の限界

第六章 承服の限界と革命

日本は革命の寸前にある。

三十七年
四月十八日
項目を決定す

分布と居住分布

同異同
財財財財

現在日本では
各比率如何

調査
都市部
居住関係

第一章

第一節 同居関係 同財関係

現在日本に於ける同居関係は矢張り

家族には家族を主としたものである。家族

より大である家族より小であるものがある。

最も多く、完全に一家族一同に同居する

という場合は零丁少い。又家族と家族

を合する家族自体も少なくある。世帯

と云ふ語は同居関係を名づけられている。

であるから、今口では社会問題としての家族

によつて一帯に同居する二人の数、数の調査を行ふは甚だ

が適当である。人は昼と夜には一帯の活動

を停止して寝にしているものである。甚だ少く

の例外なものは祖父母を養はるゝとして定住する

調

に促さる水付。

普通

家族を意味する同居団体を世帯と呼び、非家族

員の集合体を行つて、独身寮や船舶や旅

館の如き非世帯と呼ぶ場合のその形は世

帯も年毎に増加する傾向を示す。

日本の戦前までの家族型は直系家族型で

あったが、戦後民法における家族制度の放棄

と共にアメリカ文化の急激な流入によって個人主

義化、自由文化民主主義化、全親文化の

勃発の内に夫婦家族型の家族が俄かに増

加しつゝある。

戦後の工業の発展は国民の一人くを存続の

農業生活の本質
新書生活運動

戦場は、一家族の若もそれ<の戦場は別
れゝ場合が多くなつた。直に家族は農村の多
く見られ、俄にあらたな、それは農家の生活
協力係として家族は皆その生活の農業に秀が
ていた。家族は皆その生活の農業に秀が
は容易になつた。今では、男も女も皆
さまた、有利な戦場を、都市へ下りて秀
かしてゐる。

農村は、その夫婦のみか、時には老婦人の
か、耕作は、仕事として、風になつた。

戦場は、笑つた老人は男でも女でも
家の片隅に、最後は生活に甘んじ、すく

最後

と、尚、扶養せしむるに保証されながら、
さうして死んで行くと思ふのが今からの
日本の老人の運命の如くである。今までの
は物乞ひによつて金一圓五分返して老人が
權威づいてゐたところを、現在もた
生活のうちに感じてゐる分が、かえり、
は当然である。
人々も下は老人天のの世界であつた。
これから、来月、天の世界になら
てあろう。これは、死なな生活の非常は
尤もな変化である。

此同席団体についての問題は、この団体

の機能の多分に抑はりなく国民生活の
の理解のかけこみとの據拠として重
要である。国民生活の改善は関係が
社会化の要因であるかともかき合
は同様にしているといふ。

維新以来日本は第一に同族団体は
家族であった。家族は常に同族団
体となっていた。それがその漸次同族
団体と家族の外周がずれて来た
が最近その傾向は強くなった。その
明治時代では、家族即ち国民関係
が社会生活の要因となっていたが、その

増進 何人が社会生活の果位となつて来た。

才五の、家族の何人化の必要が生じたのをいせおこるにつれて直子家族型から夫婦家族型に轉換しなければならなくなつて来た。

才四は未婚家族化したものは家の先祖の存続を予おせしめようとした家の觀念の消滅となった。

才五は夫婦家族型に何れにも昔年天口を結果し、直子家族が感得していつかの老人天口をいさよはいつ

しました。

この家の文化は合理的、主我、自由、
義、民を主我の近代思想の發原
に平行してゐるもので、産業化の進展に
主我化の進行に歩調を合せてき
たことも多々ある。

我々今朝、自国を、民を、
義の思想は急激に進み、特にこ
の産業革命の發原を主我の現
代は甚だ著しく、左の如く同族
係と宗族の分別が、夫婦家族の
急増、老人人口の没落の如く

は僕かい強くなつて来た。

「民は皆何れか、東郷元君に依るす
すなはち今日昔も強と未だ未だ弱
であら。当別附近の自然洞穴に何人
た中にその洞窟者たる室長者物
が故にその依りて来た。

お花記なぬで、(一)民の生活はその
を精選し生活精選し東郷と都府
とは質的に異なる。然し両者の同
期は截然として区別が両世界に在す
とはなく、東郷が都市化になり、都府
がいつはヤレ、相異は小さくなる。

✕を組織するものはよのうである。都市
 では異質的な生活内容の人が多いの
 集団は機能によって組織される場合
 が多い。そこでは地域も強くなり、
 である。この場合、戦場を主として構成する
 五枚あり△へ

所詮は

社会の質的相違は居住中への生活と
 中心の生活の違ひから来るか、
 地域では民の生活は「居住を中心と
 行われ、都市では職場を中心と
 する。であるが、社会構成の違いが
 とも異なる。地域別の別が大いなる
 ため、包々の生活の面では、集
 める同一の地域の線の上に重なる
 が多い。農村では民の生活内
 容が、多く同質的であるから、
 の規模に依りて地域別に集団

✕

オニヤ 原産地

青森県五戸町乃至千代田県
尚友十村佐の上宮から日本の各地で

観察して見たら河川に沿って大小の

屋群が見られ、である。

また交通路は、^{位置して、}果ては、^{市街}

皮肉の稠密度、高く、果ては

橋も多々あるが、^{大さな}交通路

の強、と果ては、^{大さな}橋が

村又は道村である、^{大さな}は耕地

漁船など、^{大さな}見られる。

交通路の、^{大さな}木きな家

の稠密した都市である、^{大さな}は

の都市の様式、^{大さな}は、^{大さな}

一見して、^{大さな}である。

多くの煙突から黒煙が流れ出し
やがての交通網がたえまなく
ここに集まり、そこから放射してい
く。こんな動きは、東京の中心地
は金型だといふことになる。

都市と農村とはその要路の外に
あつた。町に現はれていく。都府
へやがたが集散するところ。やがては
やがての集散が、強くなり、いよいよ
いよいよと。

東海内部の人々の生活は農山漁
業では大部分民家である。神社や
寺や仏堂等があるところもある。
ここにも道路はあるが、村の人達しか使
えず、車の往來のものではない。

川市の外に農村を築くのは、民
衆の外に大きな産業上の又行政
の機能としての増進が加はる。こ
の事と交通網への施設が是から
方にあていさるである。

なお市街におき、外に市街の如
く、金口土を掘りて比る一歩

あ。

五枚の  ⑦ につなぐ。

△五枚前より

集団の

おれの前は積する大中小の
域的界位に最も重要な特徴を
示す。都市の社会構造は世界
職場の中心となる。都市生活構造の
その特徴を見出すのである。

生活構造は生活の空間的時空的振
いの空間的なるものの構造を意味する。

あるか、表れ、あるいはものは

振幅が甚大

都市

より規則的 又

出立の下空間的にも時間的にも振幅が
小さくともいふ。これは社会的交流
の線が都市ではより整った大規模
なこのように同化する。よき思はれ、
般に密には都市に於いて生活がより
其住居中へであり、都市ではその為
地区的であらうに對して、都市では
住居も社会関係の中を占めてはいるがよ
くも職場が生活の場を作つていふ。
な集団が都市では職場が其を占
として構成される場合が多い。
かに消費生活の依存地区の大わ

生活地区

都市における生活の理解

たゞの三つの地区を示した第一生活地区と第二生活地区と第三生活地区の構
造は都市と都市と人なる風に
あつてゐるか。

要調を

第一生活地区は、他の世帯によ
て出来たものでなく、自然村の中の何れ
世帯も第一地区と共通にもち第一
生活地区も第二生活地区も共通に
あつてゐる。都市では第一
生活地区は分離、第二生活地区も
第三生活地区も強と弱、世帯毎に
自分のものとして、ついでと考へる。

要調を

要都市生活地
を都市の指定地域
に含めつつは調査

要調査

要都市生活地は農村では多少の時差
があるが、生活時間には多少の時差
がある。生活時間を共同
として考えよう。

都市では生活時間の型の相違に
あつて、千差万別な生活時間がある。
たとえば、朝の通勤の時間、
お昼の休憩と七八時間の勤務と
夜の帰宅と、生活時間の生活者が
ある。生活時間は毎日の生活に
必要な時間である。生活時間
は決定的である。生活時間は生活の
中心である。生活時間は生活の
中心である。生活時間は生活の

型
か
自
か
存
し
て
い
よ
と
見
え
る
と
集
る
と
6

人の生活の
人の生活は千差万別である。人は
根本的性質（又は習性）別の生活には特別の

同様に思ふ。一日の中、~~仕事~~
事を終り早く生業のために用い、生業
に同じく、又はつとめて合時恰々準備し
生業に好む。又は自分の裁便を欲
望する。これらはいずれも業の不安定と
危慮を希望するからか、~~業~~には思はれぬ。
生業の本據は職場でありその他の
生活の本據は世住居である。農村では
住居が同時に職場であるが、都市化

するに於て職場は居住が、増進して
行く。職場の生活が居住内の生活に
混ざれり。可き可きには両方
独立してゐる。が、都市では必然である。
都市生活では職場生活と世帯生活
とは全く別な世界を形成してゐる。
そこで、民生生活一般を視解するに於
て、今も生活即ち職場生活と居住
生活即ち家族生活とは別に取らねば
ならない。大なる生活区を
なすものといふ。未分化の形に見る
から、素な生活において、矢張り両方

は別に考察さす。その本帳をいふもの
である。は昭々の所である。
そのなる所から生業生活に因る現
解は口民生活の中の要なる一部門といは
なく、他の生活活動^{に匹敵する}と見なす。特別の
一大部門として章を改めて論及す
る必要がある。

オーストラリア文化

今日の日本文化の急速な成長は皆
直接には交流文化の発展に因りて
いふと可い。かゝる。

現時点と数年前と十年前、二十年
前と比較して新はそれを何れも現
在の中の変化という体験といふ。

この体験の中の発展のテリ。おは過去

にも未来にもその比を見ない。若し

現象であらうか。然し交流

文化の発展の方向はこれと逆になり

てゐる低劣さ。交流を

化は絶えず進歩し、その上に人間文化

の発展が直進している様に思はれる。
今日交流文化して和字はほを思ひ出
すのさつあゝか。

~~和一言語・儀神・文字~~

和字は余り人と物ぬ心の交流
の用具として最近の重く進歩
に当惑している位である。

人の交流の用具として「チエツト」機は
教習所で米に行かうかおま、人エ
街は月への旅行を勧告している。
南極にも北極にもヒマラヤの山にも
地球上の人が行けぬところはない。

其の甚だ遠隔の巨骨の間に交流が可
能なるを明かにしてゐる。

証明してゐる。時代の甚だ遅延に密回
物の交流の因果は人の交流の因果
をそのまゝに利用する事がある。
心の交流の因果としては電波技術
の甚しい進歩によつて今日では人は
世界中何れの土地の間において通
信連絡する事が出来、世界各地の
年々なるものは教訓の内に世界中に
テレビは其の形とその音を傳へ、新聞
は半日の中に其の詳知な記事
を載せてゐる。

然し私は半世紀前、私が

年の頃 ワラチで歩いて、大陽村と
の間に新道が出来て、その上に馬車
が通じはじめた時の感激をいふといふ
道路は、~~左~~補修される自御車が通じ
電話が通じ、~~他村~~の親戚も
ではなくなつて、~~新~~土庫はフロント
に水と土直接あつて、~~今~~人々若くして
に耳と口とで心を通じ、~~い~~た時代
の記憶ははなれな
け水とも近所のこんな熱い交流
用器の発達も、純然たる絆は
今も昔と変わらず道路は
今もほ

ず、馬車すら通じないところも少くは
ない。来る時は何一つなく、總ての生活は
大した変化を来してはいないが、ラフォー
テが格段の進歩を上げて、都市
の生活をより世界の如きもの様に使之
ていふ。及ぶ範囲が広い地域の
交流の中心になつて、都市生活
の向上が見え、交通路線の細い東
部地方に比べて、近代的な
生活の停滞
が見え、そのは明らかであるが、それが
とてんを強ゆによつてものが遠及しな
り、はなつた。

都市は益々近代化し合理化し

助々となつてゐるはその外資を

目見たでもその明かであるが都市は

宋は今の厚古の鉄に支配され

暗い生活かついてゐるその明

かの様である

口民社

口民生活に於けるこの相違は交流

路線の組織における位置に因り

ていつては明かであるが交流路

線上の位置の別がこれ等の二つ

界を本質的に区分せしめる原因

ではなく統治現象における統治方針

的交流の意味

言語の神字による人同直接結合に

のけよ交流の制限

甲かてん、乙か、丙に、丙か丁に丁が

Nにとよ、是令に直接人同同位

甲よりNに及、不、甲とNとの

同に能令的交流ありと認めよ。

この場合、Nは口境線内の口

サイハその人が、口境線をのりこ

他口内の人か、地味を一まわり

してNは甲に復帰するのか。

今同位の流れが甲よりNには

と神統治所の令有是にによるもの

ることは神三象による昭あとなつてあ

る。

言語儀禮文字の共同範域の現

解は証なめ交流現象の是乃の端緒

に必要である。

同一の民族でありかつ同一の言語や儀

神と共用して、いと考ふべきは

なく、同一の言語や儀禮を共用とい

いよから同一の民族と認めらるるの

である。民族は常この口境共同圏の

展

蹊

ふか、~~N~~Nより甲には至らない場合もあり
 である。その場合は交流が一方的に存する
 場合である。Nを介して甲まで行き
 ないが、乙まで行き、また甲へも
 である。

本では、~~交流~~交流の流は、~~首~~首として首
 における甲より、~~N~~Nは皆、~~境~~境線内の

民である。Nより甲に至る場合は

外的である。口内各地のNより集

る素材に加えて文化の移転を甲^{（首都の）}

Nに送りつけ、形が口民文化の

本格的な発展過程と云えるか、首

曾この口家統への強制によって、
 保神、文字の共同と同じく、宗教
 及び芸術も同一の統治活動の下に
 おいては、王と同一の地位や
 業を共にする^{（同一の）}も強制される
 い先である。古い外分制が
 の通路にあつたこの原種という
 般ぬ、芸術の共同である
 民族の要件に考へよ、^{（共同）}
 である。

(3)

都の甲は今日では思春期といふはソ連
の先進者にあつたものを原形とし
て利用する場合甚だ多く、又も活字
化においては米国の先進者に倣んで
いるものを原形といふ場合も甚だ多
い。この字の原形の利用のため日本
文化の近歩の成長の弱つてゐる點は
此より誤ではあるが、古典日本の原形
が是れよく失はれてゐる場面も是れ成
る。